

# 「なさけ」の語義と性格

上野 辰 義

- 一、問題の所在
- 二、古今集と伊勢物語のナサケ
- 三、美的情趣のナサケ
- 四、和歌のナサケ
- 五、親和的な快感情としてのナサケ
- 六、対人的意義分野のナサケ
- 七、好感のナサケ
- 八、おわりに

中古に至り文献に用例の見いだせるようになるナサケの語義は、その当初から現代共通語以上の多義性を有していた。しかし、その諸義間の脈絡については、現在のところ洞察力・感受性などの概念を媒介として用いる説明が目につく。だが、十一世紀初頭の源氏物語成立頃までにみられるナサケの語義を整理していくと、その重要な意義分野である美的情趣に関わるナサケの用例は、概して感覚や感性に抵抗なく受容される親和的で快い美（狭義の「美」・「優美」に相当）に關与しており、同じく重要な意義分野である対人關係に関わるナサケにおいても、その始源的な位置に「好意」や「恣情」の意義をすえると、相手に親和的な魅力を感じて自分から相手に近づき感情的に受け入れるという、美的情趣のナサケと類似した性格が見いだされる。さらに、他の意義分野である、男女の性愛を基底に据える「艶情」や、対物・事態・状況に関わる「好感」のナサケ、また中世に例の拾える酒に関わるナサケ、等を見渡してもあい似た性格が見いだされるので、結局ナサケという語に普遍的に存在する意義的要素として、感覚に親和的な素直な快感情というものを出することが可能になる。つまりナサケは、従来言われるごとく、「情」一般に対応するものでなく、かなりの傾向性をもつ感情、あるいは感覚であつたということになる。このような性格をもつナサケの用例が平安時代に見いだされるようになる背後にも、こうした性格の文化を好んだこの時代の一面をうかがい見ることができよう。

ナサケという語は、上代の文献には見えず、中古になつて見いだされるが、その語義は、文献に用例の見いだされるようになる当初から現代共通語とは異なるかなりの多義性を有していた。それは、久松潜一氏が、『日本文学の思潮』で、(一) 風流とか趣味を解する心とか、風情といふ如き意、(二) 男女の情愛等にいふ場合、(三) 思ひやりの如き場合、(四) 慈悲の如き場合、と分けられ、吉沢義則氏が、『源語釈』で、『情趣』の義と、情合(今のナサケの義)の義とに、意義の上から、二分される言葉のやうである」と述べられているように、現代共通語におけるナサケが、おもいやりや同情の気持ち、またナサケナイの形で、有元秀文氏が「失望」と命名された「行為者が、対象を、自己の目標とする価値基準に照らして、劣性と判断し、失望し、傷つく心情」<sup>1)</sup>の意義を示す場合がほとんどであるのに較べて、現代共通語にはみられない風流・趣味・風情(小稿では以下「美的情趣」と総称する)・男女の情愛(同じく小稿では「艶情」と「恋情」とに分ける)などの意義をも指摘しうることである。しかし、この、現代共通語に通じる思いやりの意義(同じく以下「同情」と称する)と美的情趣・艶情などと大まかに三つ、もしくは以下

の考察においてそれ以上に分類されるであろうナサケの意義は、ナサケという一語においてどのように脈絡を保って併存しているのであらうか(ナサケナイの形に見られる「失望」の意義は、現代共通語におけるナサケの派生語のものであるので、中古におけるナサケの意義と性格を考えようとする小稿においては、この意義を考慮はするが特立はしない)。

この辺の事情については、先の吉沢義則氏が同じく『源語釈』で『情趣』(小稿にいう『美的情趣』)と『情合』(同じく『同情』)と、何れが第一次であり、何れが第二次であるかは、まだ勘へてゐない。が、常識で想像すれば人事を理解し同情する意味から、自然を理解し同情する意味に展開した、それが、自然に傾向した平安文化精神の導いたおのづからなる動きであつた、といふやうに思はれる」といわれ、これを受けてであろうか、西村亨氏は「情合(同情)」から「美的情趣」という方向で、その間の事情を、「なさけの最も普遍的な語義は、思いやりということとであり」、「思いやりのあるということとは、他人の心の動きを理解してそれに応じた行動をとること、つまりは洞察力のあるということであ」って、「こういう理解力・洞察力は、対人関係ばかりでなく、自然物に対しても通じるものである」から、自然物に向けられた「なさけは、自然

に対する理解、自然の情趣を分別する優雅な心ということである。風流・風情と訳すべきなさはこの系統のものである。『王朝恋詞の研究』と説かれた。このように「同情」と「美的情趣」の意義の媒介として同情心・理解力・洞察力さらには感受性等を想定する理解は、以後も、例えば次章で引く竹岡正夫氏や久保田淳氏等の具体的な発言にも同様に見られ、それなりに納得しやすいものではある。

しかし、これらには「艷情」やその他の意義の存在が見落とされているし、「美的情趣」には自然物以外の対象もある。このようなことを考慮し、中古におけるナサケの「同情」「美的情趣」「艷情」、そして他にも整理できるであろうナサケの意義の実態をより正確に検討していくならば、こうした意義間の脈絡やナサケという語自体の性格も幾分明らかになってくるであろうと思われるのである。

## 二

まず、ナサケの用例が文献に拾えるようになる当初の意義を整理しておく。

ナサケの用例は、十世紀半ば頃までの仮名文でみるならば、古今和歌集・伊勢物語に見いだせて、竹取物語・土佐日記・後撰和歌集・大和物語・平中物語等に見いだせない（以下、資料としては、仮名書きされた文学作品類が中心

となる。訓点資料・音義類は、諸先学の業績の恩恵に与れる範囲で参照した。そのうち、最古の例は天永四年（一一一三）加点の神田喜一郎氏蔵『白氏文集卷四』である）。従って、現状では古今和歌集卷十九に載る忠岑作の長歌にみえるものが、使用された年代の限定可能な最古のナサケの例である。

……これ（塵の身への勅撰和歌集撰進の下命）を思へば  
けだものの雲にほえけむ心地して 千々（ちぢ）のなさけも おもほえず ひとつ心ぞ ほこらしき

ここにみえる「千々のなさけ」は、現在の注釈書では、「他のいかなる感情もなく」（日本古典文学大系本）・「幾多の喜び悲しみの私情など忘れてしまひ」（日本古典文学全集本）・「（ナサケは）種々の感情。生活上の嘆きも今はなく」（角川文庫本）などと「感情」一般とする説が多い（ナサケの用例に即すならば、ナサケは喜怒哀楽など感情全般を指すことはないので、こうした注は受け入れられない）。こうした理解の源は、このナサケに注の付けられ始めた当初のものである毘沙門堂『古今集註』（未刊国文古註釈大系4）の「数々情多シテ不覚ニ其員ト云也」や『古今集両度聞書』の「人丸の道にひかれて此道にいたるをよろこびて余のちゞの心も及ばぬよしにや」あたりに求

められるが、これらでは、漢字で表記されていることもあり、字音語の「情」・ココロ（心）とナサケとの間に類義関係が存在することは知られるものの、ナサケ自体の語義は明確に説明されない。それ以後の注では、前掲のように「感情」一般と理解したり、現代共通語のナサケのもつ思いやりや同情の意義に通じる「御恵」「御恩」と解したりしているものが多数を占めている。その中で、竹岡正夫氏は『古今和歌集全評釈』において、ナサケ一般を、「単に『心』の意などではなく、自然の美しさや人間相互の関柄のくまぐまにまで寄せる愛情・同情心、あわれと思う情趣の類をい」い、「自然に向けられれば、風雅、風流な心、人間に向けられれば、思いやり、情愛といわれるもの」になると考えられて、ここのナサケを「自然の美や人への情趣・風情などといった種々の感情も感じることがなく、ただただ、という意で」あるとされ、「数多くの情趣風情も感じられず」と訳されている。実際、（千々ノ）ナサケオモホユと同類の形をもつ他の用例をみると、古今集の頃よりかなり時代は下がるが、正治二年『石清水若宮歌合』二一番祝の法眼宗円の歌に（鎌倉時代初頭までの範囲で管見に入っているのはこれのみである）、

春秋にとめるもしるき御代なれば花と月とのなさけお  
ばえて

とあり、ここでは春秋の花月の喚起する美的な気分（美的情趣）を意味している。従って同様の語句構造をもつ古今集の忠岑歌においてもこうした意味の存在を否定しきれない。もつとも、忠岑歌の場合には「千々のなさけ」とあるから、これらのナサケが法眼宗円の歌のように、「花と月とのなさけ」のみに限定されるわけではなく、その具体的な全体像はやはり不明であるが。

しかし、こうした美的気分（美的情趣）に関わっている確実な例は、古今集の忠岑歌の例と同程度に古いとみられる『伊勢物語』百一段に既に見られる。

（酒宴の日、主人の在原行平は）なさけある人にて、  
瓶に花をさせり。その花の中に、あやしき藤の花あり  
けり。

このナサケを、久保田淳氏は「こうしたら正客が快いであろうと室内に花を飾るやさしい心」を指すとされ、同時に「そういう風流な心は、四季折々の移り変りを感じ取る心に通う」（「なさけ」『国文学』第三十六巻第六号、平成三年五月）といわれて、人への気遣いと風流心との融合・連続したものと捉えておられるが、同じ気遣いといっても、後に例示するように「同情」のナサケ一般が、相手の気持ちや心を察してこちらから自分を無にして（献身して）相手に向かって共感・一体化していくもので、その相

手の気持ちも悲嘆・苦衷の類であることが普通であるのに対して、「こうしたら正客が快いであろうと（考えて）室内に花を飾る」行為の因となるこのナサケは、美的な気分（快感情）を享受すべく相手の気持ちを自分の意図に沿って変容させる方向をもつもので、「同情」のナサケの思いやりとはその性格がかなり異なる。このナサケは、『伊勢物語嬰児抄』（未刊国文古註釈大系9）が、「なさけある人とはきやしやふうりう也と行平をほめたる也」というように、主人の行平が、花の美しさ、あるいはその醸成する雰囲気の華やかさ・快さの効果を認めて、多くの花で酒宴の場を飾った彼の美的な心理作用それ自体に関わっていると、素直に見ておくべきものである。

さらに伊勢物語には他のナサケの用例がある。六十三段である。

むかし、世心つける女、いかで心なさけあらむ男（おとこ）にあひ得てしがなとおもへど、言ひ出でむもたよりなさに、まことならぬ夢語りをす。子三人を呼びてかたりけり。二人の子はななさけなくいらへてやみぬ。三郎なりける子なん、「よき御男ぞいでこむ」とあはするに、この女、気色いとよし。こと人はいとかなさけなし。いかでこの在五中将にあはせてし哉と思ふ心あり。

ここにおけるabcの「なさけ」をみると、「世心つける女」は、自らの望んだaの「心なさけあらむ男」として三郎がcで「こと人はいとなさけなし」と判断して連れてきた在五中将を何の不满も示さず受け入れているので、aの「心なさけ」とcの「なさけ」の意味は略等しいと考えられる。aの「心なさけ」について、竹岡正夫氏は『心ト情トガあらむ男』の意であろう（『伊勢物語全注釈』といわれる。この語は他にあまり例が求められないが、院政期に宮内庁書陵部本奈良花林院歌合・月・中納言君「くればとり二村山を来てみれば目もあやにこそ月もすみけれ」の歌に対する基俊判「右歌、其の心なさけは侍れど」（『平安朝歌合大成』六）や、中宮亮頭輔家歌合・恋・為真「ひたぶるに思ひたえてもあるべきにあなむつかしの心なさけや」の例が拾え、これらをみても意味的にはココロとナサケの並列されている形とまずみてよい。伊勢のaでココロとナサケが並列されている事情は、ココロアリとナサケアリという連語が意義の重なる部分をもつからであるうが、

夏山になく郭公心あらば物思ふ我に声なきかせそ

（古今和歌集卷三）

ただ、ココロとナサケの語義の差に注意し、両語がここで並列されている積極的な理由を求めるならば、女がナサ

ケのみならず、ココロの示しうる知的な魅力・精神の総合的な深みを、男に望んだからなのだろうと考えておきたい（ナサケにはこうした性格はない）。在五中将はこの場合もその要求に答ええたことになるのだろうが、そこではcの「なさけ」はaの「こころなさけ」と呼応することなく、三郎が自己の判断で母の男としては「こころ」よりも「なさけ」の方が大事であると考えたことを示しているのだろう。

この「世心つける女」は、在五中将の歌の中で「つくもがみ」と形容され、成人した子を三人もつのだから当時としては老女と考えられ、一般に恋愛の対象になりにくい存在であるから、この女の意向を介した三郎の話を聞いて、在五中将が「あはれがりて、来て寝」てあげたということとは、その「あはれがり」る対象が老女であるか三郎であるかは別にしても、cの「なさけ」の意味は、現代語のナサケに通ずる思いやり・同情心・憐みあたりにあるとみられる。しかし、そのナサケの心理構造を細かくみておくならば、単に相手の心中を推察・察知しておわるのではなく、それを自分が拒否したりせずに、文字どおり「同情」して共鳴・受容し（「あはれがりて」、さらには相手の気持ちに迎合する行為を採る仕組みをもっている（「来て寝にけり」）。こうした構造はbの「なさけ」にも、母親の気持ち

を（気づき理解していてもよい）受容せず行為的にも迎合しなかった「二人の子はなさけな」い者と言われ、「なさけなくいらへ」なかった三郎が、母の夢語りを（虚構と知っていてもよい）母の気持ちに沿って受け入れ、実現に向けて献身した点で、同様に認められ、意味もcと同様に理解される（「同情」の意義の心理的内実を以下、このように規定する）。

しかし、aの「（心）なさけ」はすこし複雑である。これは、「世心つける女」が「いかで心なさけあらむ男にあひ得てしがな」と望んだ「男」の所有する魅力であるはずであるからである。それが「同情」であつてもよいのだが、「世心つける女」の望んだものとしては、成熟した男のもつ知的な魅力・精神の総合的な深み（ココロ）や男の色っぽさ・性的な魅力（ナサケ）が思われてくるのである。こうした恋愛の色めかしい気分や性愛の快さにつらなる意義（「艶情」）を表す確実な例として、このaの「（心）なさけ」を挙げることは文脈の複雑さからして躊躇されるが、このような「艶情」に関わりうるナサケの例として、古今集・伊勢物語の頃では、このaの「（心）なさけ」が最有力のものであることは間違いない（古今集・忠岑歌の「千々のなさけ」の中にも「艶情」が含まれている可能性はある。また伊勢物語同段cの「こと人はいとなさけな

し」のナサケも在五中將に關わるゆえに「艶情」の意義との繋がりが出てくることにはなる。

こうした性愛を基底にもつ「艶情」の意義のナサケは、平安中期以降に至れば明確な例が拾えるもので、

すこしなさけあらん女の、心とめてかの親王の言ひたはぶれんには、いかゞはいとまめにしもあらん。

(宇津保物語内侍のかみ)

をとこの心といふもの、つよくありしもせよ、めづらしく、はつかなるに心ざしをつくし、いひそむるなさけのことば、たをやかなるみやびには、なにをかすべきとて、はまのちくさなるは、まつになにはづといふうたをつづけて、

(賀茂保憲女集)

なよびかに女しとみれば、あまりなさけにひきこめられて、とりなせばあだめく。

(源氏物語帚木)

(薫は中納言君から帰る時) ことにをかしき事の数をつくさねど、さまのなまめかしきみなしにやあらむ、なさけなくなどは人に思はれ給はず、

(源氏宿木)

これ(源氏物語)は、男女の縁(＝艶)なることを、げに／＼と書き集めて、人の心に染めさせ、なさけをのみつくさむことは、いかゞは尊き御法とも思ふべき。

(今鏡うちぎふ)

大原の炭をいただく賤の女は脛巾ばかりやなさけなる

らん (拾玉集第二)

昔は松風蘿月に詞をかはし、翠帳紅閨に枕をならべ、

さま／＼なりし情の末。 (謡曲・定家)

情の海、宮嶋の色町は、都を大かたに移して、女郎も

さのみいやしからず、 (好色盛衰記卷四ノ四)

性愛の端的な象徴である官能的快感に直接結びついてい

く例も中世に至ればみられる。醍醐寺本『遊仙窟』に「腰

を勒かむこと須らく巧みに快かるべし 脚を捺る更に風

流」(古典保存会複製書2期所収本により訓み下した)の

「風流」の左傍に「ナサケアラム」を中にして右に「(ナ

サケ)ニセヨ」左に「ヲモシロシ」と付訓しているのがそ

れである。近世には陰部等を指す「なさけ所」などの語も

見いだせる(傾情吾妻鑑・五立・一ノ五、伽羅先代萩・道

行)。

このように、中古になって文献に姿の見いだせるようになるナサケという語の意義を考えてみると、その当初、十世紀前半頃までの段階で(伊勢物語六十三段は後の追補といわれるがおおよそはこの時期のものとして扱ってよいであろう)古今集・伊勢物語二作品計五例の範囲において既に、「同情」「美的情趣」そして「艶情」、少なくとも「艶情」の萌芽的性格のもの、の三種を認めることができる。

### 三

この三意義を軸にナサケの語義の展開と性格を、平安中期、主要には源氏物語頃までの作品を中心にみていこう。

源氏物語頃までの作品を中心にするのは、中古におけるナサケの「同情」「美的情趣」「艶情」等の意義の脈絡やナサケ自体の性格を考えるには、ナサケの語が文献に出現する当初の状況において、しかもそれなりの量の用例の得られる範囲で考えることが必要だろうと思うからである。なお、以下の検討に際して、断つておくことがさらに三点ある。

一つは、前章でみたごとく、ナサケは具体的にはナサケアリ・ナサケナシ・ナサケナリなどの連語的形、ナサケオモホユ・ナサケニヒキコメラルなどの個別の動詞との結合の形、さらにはナサケダツ・ナサケブなどの複合語中に存在する形などの形態で現れるが、こうした具体的形態と意義との相関は、単数例のものを除いて複数例拾えるものでいうならば、一部の形態を除いて（例えば、ナサケヲカハス・ナサケガル・ナサケナサケシは同情のみなど）見られないものが多い。従つて形態との関連は、問題となる場合を除いて以下、特には言及しないということ。また、それと関連して、ナサケを構成要素とする派生語もナサケの意義と性格を考える材料となるので、検討の対象から外さな

いということ。さらに、前章で挙げた例の範囲でも既に多様であつたのだが、ナサケの意義の様相が「ちゞのなさけもおもほえず」のごとく感情・感覚のような心象である場合と、「なさけある人にて」のごとく主体の能力・機能を表す場合と、「いひそむるなさけのことば」のごとく客体的な概念を表す場合とがあるが、こうした意義の様相の相違についても、ナサケ全体の性格を見ると言う点から以下、特には言及しないということ。以上である。

さて、「艶情」については前章でかなり例示したので、それとの関係上、「美的情趣」についてまず述べていく。

伊勢物語では、美的情趣が花に関わるものであつたが、それ以後の用例で確認される順に示すならば、対象が草木一般に広がり、さらに、人声、芳香、料理、筆跡、ユエ・ヨシ・ココロバセなどの教養・センス・氣立ての類、女性の髪、造園、音楽、衣服、韻文、とさまざまな美的なものに関係する。これらの用例を見ると、大まかには美を鑑賞・享受するものから美を作り出す、即ち芸術創作への方向的拡大の傾向がうかがわれるが、それらにおける美的なものの性格を抽象・一般化してみると、華やかで軽快なものから、優しく穏やかなものまで幅があるが、概して視覚・聴覚・嗅覚などの感覚や感性に抵抗なく受容される親和的で快いものといえる。そのことについて述べる。



草木一般については次のような例が拾える。

牡丹草<sup>ぼたんくさ</sup>ども、いとなさけなげにて、花散り果てて立てるをみるにも、  
(蜻蛉日記中巻)

草木などは心おひにおひたるはつたなきものなり。人近にてあしたゆふなでつくろひたるなん、姿・ありさま・なさけ侍る。花紅葉などは、しか侍らぬものなり  
(宇津保物語吹上下)

なさけあらん草木、花盛りにもみぢ盛りにもあれ、見所あらん所の夕暮れなどありて  
(宇津保物語内侍のかみ)

おなじく木草の姿を、こゝのはなさけありておもしろくなんみゆる。  
(宇津保物語春日詣)

この家の垣根の紅葉、韓紅<sup>からくれなゐ</sup>を染めかへしたる錦をかけてわたしたるとみゆ。源宰相、なさけある枝はかしこにぞあらん、とて、  
(宇津保菊の宴)

ものゝなさけしらぬやまがつも花のかげにはなほやすらはまほしきにや、この御ひかりをみたてまつるあたりはほどくにつけて、  
(源氏物語夕顔)

これらで、「人近に」手入れをしたり、「韓紅を染めかへしたる錦」のような人の作ったりしたものと通ずる性格のものをナサケがあるといっているように、草木なら無条件にどれにでもナサケがあるのではなく、人間の感覚に親し

く好ましい、調和的なものをナサケがあるというようだ。背後の季節も春・初夏・秋のごとく穏やかなものが多い。もつとも平安後期以降になると、

(神無月の) 野山のけしき ことなれば なさけおほかる 人人の とほぢの里にまどゐして 憂れへ忘るる ことなれや  
(経信集)

夢さめて鴛鴦の声きく池水や冬のやどにはなさけなるらむ  
(拾玉集第三)

あらはるる雪の下葉の深緑松のなさけは冬ぞ見えける  
(夫木和歌抄卷十八冬三)

こころうつるなさけいづれとわかかねぬ花時鳥月雪のとき  
(玉葉和歌集卷十八)

と、初冬・冬の景物もとりあげられるが、それらもそうした険しい季節の中の親和的な要素がナサケと関連している。もちろん、季節自体が親和的なものも、一方では継続して存在している。

なさけあらん人にみせばや梅の花をりをりかをる春のあけぼの  
(清輔集)

なさけなきえぞも秋をやしりぬらんつねにことなる月の光を  
(教長集)

春は梅夏にしなければ卯の花になさけをかこふ山がつの  
かき  
(正治初度百首・源通親)

緑にみゆる梢には春のなさけをのこすかとおぼえ、

(平家物語卷七竹生嶋詣)

みだれゆく螢のけしきなきけみえて月におとらぬ夏の  
夕やみ

(夫木和歌抄卷八夏二・為相)

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨  
に向ひて月をこひたれこめて春の行方知らぬも、なほ  
哀れに情ふかし。

(徒然草一三七段)

「……昔ながらの山桜、「春になれてや心なき。」身  
にも情の残るらん。

(謡曲・志賀)

また、人声に関わる例がある。

田守りの物追ひたる声、いふかひなくなさけなげにう  
ちよばひたり。

(蜻蛉日記中巻)

例の舟子ども、からとまりより川尻おすほどは、と歌  
ふ声のなさけなきも、あはれにきこゆ。

(源氏物語玉鬘)

源氏物語の例は、後述の音楽関係の例とも関わつてくる  
が、これらでは無骨な庶民の声が、ナサケのないものと評  
されているとみられる。

また、芳香に関わるもの。芳香もいうまでもなく感覚に  
快いものである。

キヌヲキザメル花(『造花』シテスサビノタハブレカ  
トウタガハシク、香ヲタクニホヒナサケノタメカト覺

レド皆仏ノ御教ニシタガフナリ (三宝絵詞下巻)

このナサケを「慈悲」「恩恵」などと解いている古語辞  
典があるが、スサビノタハブレとある対句的文構造からし  
ても誤りである。芳香と関わるナサケはこれ以後も例が拾  
える(和歌中のものは艶情や同情のナサケとかけられるも  
のが多い)。

梅の花匂ふかきねの山里はしらぬあるじのなさけをぞ  
みる

(教長集)

にほひくる梢ばかりをなさけにてあるじは遠き宿の梅  
が枝

(六百番歌合恋部上・信定)

橘の匂ひにたぐふなさけにも言問ふ今ぞ思ひしらるる

(中務内侍日記)

妻戸をきりゝと押し開く。御簾の追風にほひ来る。花  
の都人に恥かしながら目見えん。げにや東のはてしま  
で。人の心の奥深き。その情こそ都なれ。

(謡曲・千手)

また、料理に関わるもの。

「……朝臣、なほ内膳につきて、この前の物すこしな  
さけづいてたゞいま物せよ。くだ物などいとうある  
物をえらびてつかうまつれ」とおほせられければ、こ  
の君、殿(『天』)下の手をつくして、……宴の有識た  
ち三・四十人して、調じいだしたること、いときよら

なり。

(宇津保物語内侍のかみ)

キヨラナリがこの例の直前にも、

御前の物いときよらにて参り、浅香の折敷四十、それに折敷の台・敷物、いとなくきよらにて、御器どもなどさらにもいはず、

と、多用されているところからすると、ナサケヅクは素材の趣向と調理、盛付と食器類など、美食感を催す視覚的な美しさと主に関わっているようだ。

また、筆跡に関わるものがある。

たゞうはべばかりのなさけにて走り書き、おりふしのいらへ心えてうちしなどばかりは、ずいぶんによろしくもおぼかりと見給ふれど、

(源氏物語帚木)

(勾宮が) ながの走り書いたまへる御筆づかひ言の葉も、をかしきさまになまめき給へる御けはひを、……

(宇治の姫君は) そのゆゑくしくなさけあるかたに言をまぜきこえむも、つきなき身の有さまどもなれば、

(源氏物語権本)

後者に「をかしきさまになまめき」とあるように、優美で艶のある筆跡をナサケで示しているようだ。以後の例もそれに反しない(和歌中のものは、他の意義と懸けられる)。

この宮(多子)、なに事も艶なる方、なさけ多くおはしまして、御手などもうつくしく書かせ給。絵をさへ、

なべての筆だちにもあらずなむ、おはしますなる。

(今鏡藤波の下)

いなとだにかきける筆のなさけをばつかのまにても忘れやはする

(久安百首・恋・隆季)

これらの例は、男女間で交わされる書簡や女性の筆者のものなので、すべて女手(平仮名)を主にしたものが見られるが(真名に関わることが確実なナサケの例は拾えていない)、「平安時代の仮名は、漢字もそうであるが、優婉可憐な女性的美しさを發揮するのが一般であり、」(だれの目にも抵抗を感じさせない、なだらかな親しみやすさ、さらにいえば、筆者の情意の表出をできるだけ抑制した表現をとっている」(堀江知彦「平安時代の書風」『書の日本史第二巻』)という評の存在も参考になる。

また、ユエ・ヨシ・ココロバセと関わるナサケがある。

(妻としては) たゞひとへにものまめやかにしづかなる心のおもむきならむよるべをぞつひの頼み所には思ひ置くべかりける。あまりのゆゑよし心ばせうちそへたらむをばよるこびに思ひ、すこし遅れたる方あらむをもあながちに求め加へじ。後ろやすくのどけき所だに強くは、うはべのなさけはおのづからもてつけつべきわざをや。

(源氏物語帚木)

ここでは「たゞひとへにものまめやかにしづかなる心のお

もむきならむよるべ」が「後ろやすくのどけき所」に、また「あまりのゆゑよし心ばせうちそへたらむ」が「うはべのなさけ」に相当する。ユエ・ヨシ・ココロバセは、その個々の詳細な内容については他の機会に考えるとして、人の資質としては、教養・センス・機智の類を指し（ココロバセはユエ・ヨシを含むより高次の知的作用としての側面も有す）、知的な花としてその適度な発現は（相手の男にとつて）好ましいものであった。<sup>(4)</sup>

同じころ通ひし所は人もたちまさり、心ばせまことにゆゑありぬべく（歌を）うち詠み、（源氏物語帚木）  
（六条）御息所は、心ばせのいとはづかしくよしありておはするものを、  
（源氏物語葵）

また、女性の髪に関わる例がある。

いと長き人も額髪は少し短うぞあめるを、むげにおくれたる筋のなきやあまりなさけなからむ、  
（源氏物語葵）

御髪は、すちも見えぬまでつやくとこぼれかゝり、  
すゑは海松房とたとふれば、いとなさけなきやう也。  
（夜の寝覚巻四）

これは、前章で挙げた『拾玉集』の「大原の炭をいただく賤の女は脛巾ばかりやなさけなるらん」の歌とともに、女性の艶媚な官能的魅力と関わっていると見られる。これは

さらに、次の『とはずがたり』の例の示す女性のもつ優しさ柔らかさ親しみやすさを表すナサケとも連なっているであろう。

この江田といふ所は、若き娘どもあまたありて、なさけあるさまなれば、何となく、心とどまるまではなけれど、さきの住まひよりは心延ぶる心ちするに、  
（とはずがたり巻五）

これらは言うまでもなく感覚的に親和的で快いものである。  
また、造園に関わるものがある。

（大堰の山荘は）立石ども、皆まろびうせたるを、なさけありてしなさば、をかしかりぬべき所かな。  
（源氏物語松風）

立石は作庭の根幹であり、『作庭記』がその冒頭で「（地形条件を考慮して）風情をめぐらして、生得の山水をおもはへて、その所々はさこそありしかと、おもひよせ」（石を）たつべきなり」と述べるように、平安時代の庭園はおおむね現実の日本の自然に似た景観を表現しようとした。塩竈や天の橋立などの景を京内の園池にうつし、六条院の中宮御所の庭が、「嵯峨の大堰のわたりの野山、無徳にけおされたる秋なり」（源氏物語少女）などと評されたものも、そうした意匠の現れである。だが、庭園にうつされた自然は、右の事例や浄土教庭園を含めた当時の遺構からも知ら

れるように、人を威圧し圧倒するような風景ではなく、人に親しい穏やかな、あるいはゆつたりとした傾向のものである（もつとも局部的には「あらいそのありさま」〔作庭記〕を立石するが）。この大堰の山荘は京外、大堰という景勝の地に設けられたので、自然を園池にうつすというより、同じ松風巻に「これは、川づらにえもいはぬ松蔭に、なにのいたはりもなく建てたる寝殿のことそぎたるさまも、おのづから山里のあはれをみせたり」と述べるように、周囲の自然を組み入れ、連続一体となったものであった。そうした様は、後の増鏡の同じくナサケの用いられる嵯峨院の亀山殿の描写からもうかがえる。

小倉の山の梢、戸無瀬の瀧も、さながら御垣の内に見えて、わざとつくりはぬ前栽も、おのづからなさを加へたる所がら、いみじき絵師といふとも、筆も及びがたし。  
（増鏡おりる雲）

源氏物語松風のナサケは作庭者の主体的な能力なのか庭園の有する客体的な概念なのか判断が難しいが、こうした温雅な風景と関連していることは確かであろう。

また、音楽に関わるものがある。まず雅楽に関するもの。

大將（夕霧）は、おほやけがたはやう／＼おとなぶめれど、かうやうになさけびたるかた（算賀の音楽や舞、装束）は、もとよりしまぬにやあらむ、

（源氏物語若菜下）

雅楽について、荻美津夫氏は、当時の「音楽特に雅楽に対する共通の意識として極楽の音楽に通ずるものとすることがみうけられ」（『日本古代音楽史論』一八五頁）といわれる。そのことには当時における浄土教の隆盛や物語における潤色の影響もあるのだろうが、次例のごとく基本的には認められるものである。

（光源氏の青海波の舞は）同じ舞の足踏み、おも／＼、世に見えぬさまなり。詠などし給へるは、これや、仏の御迦陵頻伽の声ならむと聞こゆ。（源氏物語紅葉賀）  
（法成寺御堂供養に、後一条天皇行幸するに）左右の船衆、龍頭鰐首舞ひ出でたり。曲を合せて響き無量なり。管を吹き絃を引き、鼓を打ち、功を歌ひ、徳を舞ふ。御覧ずる御心地、この世の事とおぼされず。

（栄花物語音楽）

正教に、簞簞は迦陵頻の声を学ぶといへる事あり。

（古今著聞集卷六）

雅楽には、天上的な恍惚や法悦に通ずる感性的な欲びをもたらす一面があったらしい。また、吉川英史氏も、雅楽について、例えば次のごとき例に基づいて、

陵王の舞ひて急になるほどの末つ方の衆、はなやかににぎは／＼しく聞こゆるに、  
（源氏物語御法）

「多くのその時代の物語や記録において、当時の人々が、雅楽を聴いて相当軽快な華やかな印象を得たことが、察せられる」(『日本音楽の性格』九三頁)といっておられる(同氏はこれを理由の一つとして、平安時代以前の雅楽が、現在の速度よりはるかに急速であつたろうと推論されている)。

また、同じ音楽でも催馬楽に関するものがある。

(男踏歌に) 竹河うたひて、かよれる姿なつかしき  
声くくの、絵にもかきとどめがたからんこそくちをし  
けれ。……いにしへの人は、まことにかしこきかたや、  
すぐれたることもおほかりけん、なさけだちたる筋は、  
このころの人にえしもまさらざりけんかし。

#### (源氏物語初音)

催馬楽は、先の雅楽のスタイルに則り、音楽的要素を加えたもので、その声楽としての性格には、この例にも「なつかしき声く」とあるように、先の人声の項でみたと同様、無骨でない洗練された情調が求められたものと思われる。

また、衣服に関わるものがある。

(浮舟の姿) 白き単衣の、いとなさけなくあざやぎた  
るに、袴も検皮色にならひたるにや、光もみえず黒き  
を、

#### (源氏物語手習)

ここでは、「白き単衣」のはっきりしたそっけない印象が、

ナサケナシと評されているらしい。参考のために後代の例を紹介しておく、

左大将殿隨身、赤地の錦の色も文も目なれぬさまに好  
もしきを、なさけなきまでさながらだみて、ませに山  
吹を、白がねにてうち物にして、ひしとつけたり。

#### (増鏡秋のみ山)

ここでも、「赤地の錦」の「好もし」さを殺しかねない過度の彩色や意匠などの、刺激の強さがナサケナシといって否定されている。穏やかな好感のもてるものがナサケに値するらしい。

以上、源氏物語成立時頃までの、美的情趣に関わるナサケを見ると、ナサケの意義の様相が、感情・感覚のような心象である場合、主体の能力・機能を表す場合、客体的な概念を表す場合、のいずれにおいても、ナサケの関わる美・情趣は、華やかで軽快なものから、優しく穏やかなものまで幅はあるものの、概して人の感性に抵抗なく素直に共感・受容できる親和的で快いものといえる。このような美的性格を、美学が美的範疇として区分するところの「崇高」「悲壮」「滑稽」「フモール」「醜」などに比定するならば、いわゆる「美」(狭義の美)、すなわち「調和的性格の著しい、そして吾人の眼に程よき快感を与へるやうな、明朗円満なる美」(大西克礼『美学』上巻四二頁)、ないし

「優美」、すなわち「美」の調和性がもつ緊張感を本来的に欠き、比較的容易に感性に受容され翫賞される美的なもの（源豊宗氏によれば、日本のそれは、ヨーロッパのこの

ような感覚的な優美に、抒情的なポエジーを潜ませ、かつポライト「優雅」であるという<sup>(5)</sup>）に相当するであろう。

もつとも、ナサケの美的性格をこのように規定してしまうと、そこから逸れるような趣きをもつ例も、源氏物語以後、平安後期には拾えるようになる<sup>(6)</sup>。

（海賊に出会い）用光ひちりき取り出だして、うらみたる声に、えならず吹きすましたりければ、白波ども、おの／＼かなしみの心おこりて、かづけものどもをさへして、漕ぎはなれて去りにけりとなむ。さほどのことわりもなきものゝふさへ、なさけかくばかり吹き、かせけむもありがたく、又昔の白波は、なほかゝるなさけなむ、ありける。（今鏡昔語り）

例えば、この例では、ナサケを「同情」の意義でなく「美的情趣」のそれに解してよいならば、筆策を「うらみたる声に」吹き、「かなしみの心おこりて」聞いたとあるので、悲哀の気分が関与することになる。また、和歌・漢詩においても、

ゆふまぐれ霧のまがきのさびしさにをじか鳴くなり秋の山里

……霧のまがきに鳴きけむ鹿こそ、いますこしなさけありてきこゆれ

（太皇太后宮亮平経盛朝臣家歌合 十七番鹿 清輔判）  
彼廬山の草庵の夜曲は、情ある事を、楽天の詩に感じ、此大岳の柴の宵の雨には、何事を貧道の歌にはづ。

（鴨長明海道記・大岳）

など、秋暮の寂寥感、人生の不如意等、やはり悲哀感の漂うものがある。悲哀は一般には不快に属す。しかし、美学で「悲哀の快感」「美的憂愁」ということがいわれるように、悲哀は美的でもありうる。その解釈は単純にはいかなかった。こうした悲哀を帯びた気分も、音楽や韻文という美的形式による加工や、創作者とは異なる存在である享受者による観照、すなわち美的体験を経て、客体化・純化が施されることになり、精神的感動として受容されやすくなる、まして、その形象化された悲哀が世界や人生の真実と触れ合うものならば、なおのこと悲哀の純化・普遍化が助長されることになり、悲哀中の不快的要素が高次の快に変容されるということ、さらに、悲哀自体の性格も、怒りや憎しみのごとくに威圧感や緊張感を人にさほど与えず、本来的に生的勢いを喪失した弱々しいものであるゆえに、抵抗はあっても受容がそれほど困難でないという、「優美」

に接近した性格をもつこと、こうしたことが、ナサケの美的な性格一般との繋がりを可能にしているのだと。ともかく、平安後期から中世にかけてはこのような悲哀味のある美的情趣とかかわるナサケが見られるが、こうした情趣をも、抵抗少なく受け入れられる快いものと認めてナサケと関わりをもたせた感性が存在したということが、この時期には大事なことなのであらうと思われる。

#### 四

ところで、こう述べてきて、源氏物語頃までの美的情趣に關与するナサケには、もうすこし注意すべき例がある。韻文、主要には和歌に關わるナサケである。

(夫と第三者との贈答歌の批評を夫から依頼されて)  
雨もよにあればすこしなさけあるこちしてまちみる。

(蜻蛉日記下卷天延元年五月)

(高欄に寄りかかつて宮)言の葉ふかくなりける  
かな

とのたまはすれば、

(室内の和泉式部)白露のはかなくおくとみしほど  
に

ときこえさするさま、なさけなからずをかしとおぼす。

(和泉式部日記)

蜻蛉日記の例は「雨もよにあれば」という状況下にもかかわらずわざわざ使いをよこしてきた夫に和歌の批評を依頼されたことによつて、作者の心中に湧き起こった風流な心もちをナサケと呼ぶ。また和泉式部日記の例は、「きこえさするさま」が「なさけからずをかし」といつているのだが、式部は宮の唱に取次ぎを介して和したようだから、取次ぎを介した様態としての「さま」ではなく(取次ぎを介したことがナサケナカラズとあえて評価される積極的理由を見いだしにくい)、「白露の……(かりそめの宮様とのお付合いと存じておりましたうちに——交わす言葉も情愛が深くなりました——)」という内容で和した対応の「さま」を、ナサケナカラズと宮の側から評したもののようだ。このような感慨や和歌的対応の評言としてのナサケは、和歌と關与しつつどのような性格のものとして捉えることができるのであらうか。

ここで参照されるべきは、源氏物語以降、歌論的場を中心にして明確に拾えるようになるナサケであらう。後拾遺和歌集仮名序には、古今集の忠岑歌について、久々に勅撰集にナサケがあらわれる。

(公任は)今もいにしへもすぐれたるなかに、すぐれたる歌を書きいだして、こがねたまの集となむ名づけたる。そのことば名にあらはれて、その歌なさけ多し。



……(後拾遺集の歌は)身は隠れぬれど、名は朽ちせぬものなれば、いにしへもいまもなきける心ばせをばゆくすゑにも伝へんことを思ひてえらべるならし。しからずは、たへなることばも風の前に散りはて、光ある玉のことばも露とともに消えうせんことによりて、

(後拾遺和歌集序)

ここに二つあるナサケのうち、金玉集の歌をほめた前者のものは、第三章末に悲哀味を帯びたナサケの例として示した太皇太后宮亮平経盛朝臣家歌合の判詞と同様、歌合の判詞中のナサケが、親和的な快い情調(一部悲哀味を帯びたものも含めて)を指しているのと同類のものであろう(金玉集の歌は俊頼髓脳でも、俊頼が秀歌の条件としてあげる心・詞・節等をもしたのものとしてほめられており、当時、評価の高かったことがわかる)。

夕霧に隅田<sup>すだ</sup>のわたりはみえねども舟人よぶは声きこゆなり

左の歌、姿はあしうはべらぬに、すだのわたり、とよめるぞ、なきけなき心地する。

(雲居寺結縁経後宴歌合 十一番霧 基俊判)  
今よりは更け行くまでに月は見じその事となく涙落ちけり

待つ人の来ぬも思へばつらからず寝なばこよひの月を

みましや

ともになきけあり。いづれとわきがたし。

(太皇太后宮大進清輔朝臣家歌合 十六番月 通能判)  
君やあらぬ我が身やあらぬおぼつかなたのめしことのみなかはりぬる

(右歌略)

左、ふりてやあらんとおぼゆれども、なきけなきにしもあらず。

(太皇太后宮大進清輔朝臣家歌合 廿九番恋 通能判)  
従つて今の場合、このナサケはさほど重要ではない。後者のナサケが問題である。これは、次例のごとく和歌のみならず、漢詩・音楽等の創作・演奏にも関わる主体的な能力あるいは心象を指している。

やまと御言の歌は、わが秋津嶋の国のたはぶれあそびなれば、神代よりはじまりて、けふ今に絶ゆることなし。おほやまとの国に生まれなむ人は、男にても女にても、貴きも卑しきも、好み習ふべけれども、なきける人はすすみ、なきけなきひとはすすまざる事か。たとへば、水にすむ魚の鰭を失ひ、空をかける鳥の翼の生ひざらむがごとし。

(俊頼髓脳)

(後白河院に)近くなれ仕ふまつり遠く聞き伝ふるたぐひまで、ことに触れ折に臨みて空しくすぐさずなさ

け多し。春の花のあした秋の月のゆふべ、思ひをのべ  
心をうごかさずといふことなし。あるときには糸竹の  
声調べを整へ、あるときにはやまとものこしの歌こと  
ばをあらそふ。

(千載和歌集仮名序)

春霞たつたの山に初花をしのぶより、夏はつま恋ひす  
る神なび山の時鳥、秋は風に散るかづらきのみぢ、  
冬はしろたへの富士の高嶺に雪つもる年の暮まで、み  
なをりにふれたるなさけなるべし。

(新古今和歌集仮名序)

(高岡の石見の入道は) いとなさけある者にて、歌つ  
ねに詠み、管弦などして遊ぶとて、

(とはすがたり巻四)

これらのナサケは感受性・もののあわれと訳されること  
があるが、そのような語では関わる美的情趣の性格が漠然  
としていて、正確ではない。それよりも風流心・風雅な心  
とある方がまだ優れているとみられる。というのは、源氏  
物語以降、和歌・音楽・自然鑑賞等において明確にスク・  
スキと通ずるナサケの例が拾えるようになるからである。

(男踏歌に) 竹河うたひて、かよれる姿なつかしき  
声／＼の、絵にもかきとどめがたからんこそくちをし  
けれ。……いにしへの人は、まことにかしこきかたや、  
すぐれたることもおほかりけん、なさけだちたる筋は、

このころの人にえしもまさらざりけんかし。中将など  
をば、すく／＼しきおほやけ人にしなしてんとなむ思  
ひおきてし。みづからのあざればみたるかたくなしき  
をもてはなれよと思しかど、猶したにはほのすきたる  
筋の心をこそとゝむべかめれ。

(源氏物語初音)

(王子猷は) 世中のわたらひにほだされずして、たゞ  
はるの花秋の月にのみ心をすましつゝ、おほくの年月  
を送りけり。ことにふれてなさけふかき人なりければ、  
かきくもりふる雪はじめて晴れ、月の光きよくすさま  
じき夜、ひとりおきゐて、なぐさめがたくやおぼえけ  
ん、(戴安道の家に向かうが、途中で夜が明けたので、  
会うことなしに)

もろともに月見むとこそいそぎつれかならず人にあ  
はむものかは

とばかりいひて、つひに帰りぬ。心のすきたるほどは

これにて思ひしるべし。

(唐物語上巻・戴安道)

是ヲ思フニ今ヨリスエザマノ人ハ、タトヒオノヅカラ  
事タヨリアリテ、カシコ(井手川)ニ行ノゾミタリト  
モ(カワズノ声ヲ)心トゞメテ聞ムト思ヘル人モスク  
ナカルベシ。人ノスキトナサケトハ年月ニソヘテオト  
ロヘユクユエナリ。

(長明無名抄・キデノヤマブキ並カハヅノ事)

スク・スキは、「数寄<sup>ス</sup> 辟愛<sup>ヘキアイ</sup>之義也」(元和本下学集言辞

門、岩波文庫)とあるように、趣味的事柄・芸事への愛好や執心を指すが、このようなスク・スキとナサケがどうして通じているかという点、ここに示した源氏物語初音巻の部分に、「かしこきかた」が「すくすくしきおほやけ人」、つまり取っ付きにくい実直さ・堅物性をもつのに対して、「なさけだちたる筋」が「あざればみたるかたくなしき」、つまりはめをはずして体裁を崩した見苦しさをもつと言っていることが回路となる。もちろんこれは光源氏の卑下の言葉であるから割り引いて受け取らねばならぬが、ナサケにはこうした身を持ち崩す危険が潜んでいるというのである。これは、これらのナサケの例が関与する和歌・音楽・自然鑑賞が、そうした人の心を抵抗なくひきつける性格、親和的な感覚的快さをもつものだったからである。「なつかしき声くくの」とあつた催馬楽の歌謡や、「はるの花秋の月にのみ心をすまし」とあつた自然美のもつ親和的な魅力については多言を要しないだろう。歌枕としての井手の山吹と蛙については、和歌一般に関する次のような発言を見ればよい。

今の人歌はあだなるもてあそび、はかなきことゝ思へり。いにしへを見ればしかにはあらず。佛もひかりをやはらげて、この事をのたまふ。

(奥義抄)

おほよそのことわざ(和歌のこと) わがよの風俗として、これを好みもてあそべば、名を世世に残し、これを学び携はらざるはおもてをかきにしてたてらむがごとし。

(千載和歌集仮名序)

(遁世出家しても)歌ばかりや罪得ぬあそび戯れにて、心を慰むることゝなむ思ひ侍るまゝに、(続歌仙落書)先に引いた俊頼髓脳にも、「やまと御言の歌は、わが秋津嶋の国のたはぶれあそびなれば、神代よりはじまりて、けふ今に絶ゆることなし」とあつた。当時、和歌は日本人が好みあそび戯れるものと認識されるほど、日本人には抵抗なく受け入れられる親和的な存在だったのである。こうした親和的な魅力をもつ和歌・音楽・自然鑑賞などの趣味・芸事は、その受容に障碍なき魅力ゆえに、人が愛好しやすく、さらには熱中しすぎることでの通常の生活態度から逸脱して身を持ち崩し不体裁になる傾向を強く有していたのである。スキはそうしたナサケへの傾斜が顕現化するところに現れるものであり、趣味や芸事への辟愛・執着心を表す。従って、後拾遺和歌集仮名序の例を含め、和歌・漢詩・音楽等の創作・演奏・自然の賞美にも関わる主体的な能力や心象を指すナサケは、スクという行為、スキという状態を惹起しやすい、感覚的に快いもの・好ましいものに関わる主体の心的態度、趣味・芸事を好み堪能な心、風流心を

指すと考えられる。(このようなナサケと漢詩との繋がりについてはまだ十分検討していかないで、いまは和歌に準じて扱っておく。漢詩については次のような例がある。

「その書はなの名は、続本朝秀句といひて、三巻、なさけ多く撰ばせ給へる文も侍るなり」(今鏡すべらきの中)

このように平安後期に顕著になる、風流韻事を好みたしなむ主體的な心、風流心を指すナサケの存在を考慮すると、平安中期にみられる、上記の蜻蛉日記の「すこしなさけあるこちしてまちみる」や和泉式部日記の「なさけなからずをかし」の例も、こうした概念化した風流心そのものではないが、雨にも障らず和歌の批評を依頼されたことによる趣味的な満足・快さの感情や、唱に和しうる趣味的な対応能力を意味するものとして、これらの風流心と繋がっており、さらにこの流れは、第二章で見た伊勢物語百一段の、酒宴の日、瓶に花をさして客をもてなした行平の「なさけある」心にも溯るものといえる。

## 五

こうして、源氏物語頃までの美的情趣に関わるナサケを見ると、その美的情趣の性格は、狭義の「美」や「優美」に比定可能な、概して人の感性に抵抗なく素直に共感・受容できる親和的で快いものであると抽象することができた。

すると、ナサケの意義の様相には、(A)「すこしなさけあるこちして」のごとく主体の感情・感覚を表す場合と、(B)「なさけある人にて」のごとく主体の能力・機能を表す場合と、(C)「なさけある枝はかしこにぞあらん」のごとく客体的な概念を表す場合とがあったが、この三様相を繋ぐものも、そうした親和的な快感情それ自体と考えておいてよいだろう。(A)はそれが主体の心に具現したものであり、(B)はそうした感情に関わる行動能力であり、(C)はそうした感情を主体の内にひきおこさせる客体に宿る性格と解釈されるからである。

すると、これまで述べてきた、美的情趣以外の意義分野である艶情も、性愛の快感情を基底にすえるものであったから、ここに美的情趣のナサケとの脈絡をたどることができし、また、源氏物語頃までの文献には拾えないのだが、中世に見いだせる酒に関わるナサケも、その意義的脈絡を酒酔による快感情に求めることが可能であろう。

### 不酤酒戒

花のもと露のなさけは程もあらし酔ひなすすめそ春の  
山風 (新古今和歌集巻二十)

いつの暮とかしひてたのまん

いまはとてなさけすゝむるはなむけに(竹林抄巻七)  
今のおたる(『樽』)のなさけ(『若酒を掛ける』)をば

いつのよにか忘れん

(わかな 大蔵虎明本狂言集の研究本文篇5女狂言之類)  
『音訓篇立』にも、白酒を表す「醴」に、「白サケ ナサケ」(天卷中冊、古辞書音義集成本)と付訓されている。

こうしたナサケの意義の中核にあるとみられる、感覚に親和的な快感情自体が具現されているとみられる用例は、蜻蛉日記の「すこしなさけあるこちしてまちみる」の例を経て、現状では最古の、使用された年代の明確なナサケの例である古今集の忠岑歌中の「ちゞのなさけ」の幾つかとしても見いだせそうだ。そうすると、親和的な快感情としてのナサケの具現は意義としても用例としても、文献にナサケが見いだせる当初からのもの(蜻蛉日記例を最古としてもそれに近い)と考えられるが、それでは、こうした親和的な快感情としてのナサケは、ナサケの他の重要な意義分野を構成する対人関係に関わる「同情」とどのように繋がっているのだろうか。

## 六

「同情」の意義は、第二章で述べたように、伊勢物語六三段で、「世心つける」母の虚構の夢語りを「母の意向を仮に察していても受け入れずに」なさけなくいらへてやみぬ」る二人の子の行為と、「こと人はいとなさけなし」と

判断して在五中将を母にひきあわせた三郎の思惟に用いられたナサケとに既に認めることができた。そして、その際検討したように、この「同情」のナサケの心理構造は単に相手の心中を推察・察知して終わるのではなく、それを自分が拒否したりせずに、文字どおり「同情」して共鳴・受容し(「あはれがりて」、さらには相手の気持ちに迎合する行為(「来て寝にけり」)を採る仕組みをもっていた。こうした心理構造をもつ「同情」のナサケは、源氏物語頃までの範囲でも多くの例をみいだせる。

(実忠からの貴宮への懸想文を前にして)木工の君、  
「なほこの度ばかりは、の給はせよ。いみじくなりたりとて、いとほしがり給ふを、人を助くるとおぼせかし」あて宮「……さてもかゝる人には、まだなん言はぬぞよき」「などしも人になさけなくなりしに。さあらでも見えぬるぞ」など、の給へば、

(宇津保物語察の使)

(宮の来訪に)女いと便なき心ちすれど、なしときこえさすべきにもあらず。昼も御返りきこえさせつれば、ありながら帰したてまつらんもなさけなかるべし、ものばかりきこえんと思ひて、  
(和泉式部日記)  
(特別の後見役もない玉鬘の大君が参院する日、大君を息子の嫁にと望んでいた夕霧が叔父として息子

の)源少將兵衛佐など奉れ給へり。なさははおはすか  
しと、よろこびきこえ給ふ。

(源氏物語竹河)

(薫は)故みこの御山住みを見そめ給ひしよりぞ、淋  
しき所のあはれさはさま異なりけりと、心苦しうおぼ  
されて、なべての世をも思ひめぐらし、深きなさを  
もならひ給ひにける。

(源氏物語宿木)

しかし、こうした「同情」は、共感・受容する相手の心  
情が悲嘆・苦衷の類であるのが一般だから、「同悲」「同  
苦」となることがほとんどで(今回收集した用例の範囲内  
で最も「同喜」「同歎」の色合いの強いものはここに例示  
した、めでたい結婚の日に用いられた源氏物語竹河のもの  
である)、それを自己の心に受け入れ一体化させるのには  
抵抗が生じる。美的情趣の意義分野のナサケの関わる性格  
が、「美」や「優美」に比定可能な、概して人間の感性に  
親和的で快いものであったゆえに、それを抵抗なく素直に  
共感・受容できたのとは異なる。もともと美的情趣のナサ  
ケにも平安後期以降、韻文や音楽に関わるナサケに悲哀味  
を帯びるものが見いだせ、「悲哀の快感」「美的憂愁」とい  
うことがいわれたように、「同情」のナサケにも相手の悲  
嘆や苦衷を受け入れ、心的に相手と一体化することで高次  
の快感・歓びが形成されるのだということも考えられるか  
もしれない。が、それはやはり観念的であって、現実的で

はないだろう。というのは、実際には「同情」することで、  
伊勢物語六三段やここに例示した源氏物語宿木に「あはれ  
がりて」とか「心苦しうおぼされて」とかあったように、  
自分自身も胸痛くなることがあるのだから。ただ、美的情  
趣の場合に、そうした悲哀味が威圧感や緊張感をさほど人  
に与えず、本来的に生的勢いを喪失した弱々しいものであ  
るゆえに、抵抗はあっても受容がそれほど困難でなく、  
「優美」に接近した性格となつて、ナサケの美的な性格一  
般との繋がりを可能にしていたことは、参考にしてよい。  
「同情」のナサケの関わる悲嘆や苦衷も所詮は他人のもの  
であり、そうした心情に共感しそれを受け入れても、相手  
とは異なる現在の自分の境遇や生活がそのことによつて相  
手のようなものに変化し、覆えることは普通ないからであ  
る。つまり受容しやすいのである。もともと受容・一体化  
とリンクして発動する相手への献身は多少なりとも自己犠  
牲的なものではあるが。

ところで、こうした「同情」のナサケに対して、もつと  
素直に積極的に自分から進んで相手を受容していく対人的  
なナサケが、源氏物語頃までにある。「男女の情愛」「好  
意」などと訳されるものである。

(胸を病む落窪姫のために、侍女のおこぎは姫を妻に  
望む典藥助に温石をもつてこさせようとして)「……

これにてこそ心ざしありなし見えはじめ給はめ」といへば、典葉……、いかゞはせん、さは、いりたちたるやうなれど、いとやすし、心ざしなさけを見えむとて石求めむとて立ちぬ。

(落窪物語卷二)

ここでは姫が胸を病んでいる状況があるために「同情」のナサケとの識別がまぎらわしいが、あこぎは典葉助に、姫への意向・関心の存在を顕示するためには温石をもつてくるのがよいという提起を行い、典葉助はそれに乗つて温石を探しにいったのだから、典葉助のその行為は姫を得ようとする自分のためのものであり、自己犠牲・献身からは免していない。従つてこのナサケはココロザシと類義的で、姫への「恋情」「厚情」などを表しているとみられる。こうした意義をよりわかりやすい形で示している例は、源氏物語以後だが、夜の寝覚にも見いだせる。

(帝は寝覚上に) あすは逢瀬とたのむべくもあらざめる人の気色に、たゞわがなさけばかりを、つくし知らせ給ひ、さりととも、おぼし知らずはあらじかし、と思しめす。

(夜の寝覚卷三)

また、紫式部日記には次のような例がある。

(同僚の女房に対し) 人のくせなき限りは、いかではかなき言の葉をも聞こえじとつつみ、なげのなさけつくらまほしうはべり。人、すすみて憎いことし出でつ

るは、わろきことをあやまちたらむも、言ひ笑はむに、はばかりなうおぼえはべり。

(紫式部日記)

ここでは、癖のない人にはちよつとした評言も言わないように注意されてしまい、わずかの心寄せでも示したくなるという。こうしたこのナサケは「好意」などに相当するもので、「くせなき」という他人の人間的魅力にひかれ、自分が自分の欲求に基づいて積極的に形成した感情である相手の立場・心情などへの顧慮はその発生において関わりがない。同様の例はやはり源氏物語以後だが、次のようにみえる。

なりちかの大納言の女君の、権亮これもりの上なりし人は、知るゆかりありしもとより、葉玉おこすとて

君に思ひ深き江にこそひきつれどあやめの草の根こそあさけれ

返し

ひく人のなさけも深き江におふるあやめぞ袖にかけてかひある

(建礼門院右京大夫集)

答歌の「ひく人のなさけ」は贈歌の「君に思ひ」を受けている。

こうした「好意」「恋情」のナサケは、相手の魅力に自分が惹きつけられて自分の方から相手を包摂し、自分の欲

求に基づいて相手に行動を起こしていくもので、「同情」のナサケが多少の抵抗感を伴って相手を受け入れ自己犠牲的に献身するのは性格を異にする。しかし、その骨格は共通している。相手を心的に受容・包摂してさらには相手に向かつて行動を起こすことである。この共通点が、言語的にはナサケが、「好意」「恋情」「同情」の三者を統括していることと対応するわけである（このようなナサケのもつ意義的機構は「愛」という言葉のもつものと近い関係にあるが、ナサケの訳語に用いられることのある「人情」とは基本的なところで異なり、ナサケの方が傾向性を有す）。ただ、こうした共通点をもちつつ、この共通的な機構が単純に作用し発動しやすいのは、抵抗感を伴う「同情」よりも、相手に魅力を見いだして自分から素直に積極的に相手と一体化していく「好意」「恋情」の方であり、その中でもより単純な機構をもつのは、男女間の執着的な感情に限定される「恋情」よりは浅く広範囲に抱かれる「好意」の方であろうと考えられる。「同情」はそうした対人的な「好意」の姿勢を、共感に苦痛を伴いながらも抵抗を乗り越えて相手を自己の内に包摂してやることで、二次的に構成していくものだとみなされる。

してみると、ここに、「好意」を最も単純な形態とする「恋情」「同情」などの対人的意義分野におけるナサケと、

意義の中核に、感覚に親和的な快感情の存在を見いだせた他の美的情趣や艷情・酒等に関わるナサケとの繋がりも見えてくる。対人的意義分野におけるナサケも、「好意」に始原的にみられるように相手に親和的な魅力を感じて「同情」の場合はその擬態）相手との心的一体化を志向していたからである。親和的な魅力とは心に映ずれば感性に素直な快感情にほかならない。ナサケの本質と、ナサケという語の諸義間の脈絡は、どうやらここあたりに求められそうだ。

## 七

ナサケの本質を親和的な素直な快感情と考えておくと、これまで検討してきた範囲の諸義で解釈できなかった用例も理解できるようになってくる。

（光源氏の）御よはひのほど、人のなびきめできこえたるさまなど思ふには、すぎ給はざらんもなさけなかるべし。  
（源氏物語夕顔）

これは「すぎ給はざらんも」とあるので一見艷情に関わることに見えるがそうではなく、年齢や身分も含めた有様からすると、光源氏がそうした好色ざまに赴かないのは、残念で好感がもてない、つや消しだろうというのである。すると、このナサケ―ナシで存在が否定される前のナサケは、



期待される事態が実現していることによる満足感・快適さ、心の中の色、浮き浮きしたはずむ心、あたりを指している見られる。

（女の家から下仕えが出て来て返歌を伝えて戻ったが）又人もいで来ねば、（光源氏は）帰るもなさげなけれど、明けゆく空もはしたなくて殿へおはしぬ。

（源氏物語若紫）

これも同様。ここでは既に歌の贈答も成立し、光源氏が女の家に入って寝所を共にするにはさらなる歌のやりとりが必要だが、応対する者も出て来ず仕方なく二条院へ戻らねばならず、期待していた女との共寝もできずにがっかりだというのである。やはり、ナサケ自体は期待される事態が実現していることによる満足感、浮き浮きしたはずむ心、あたりを指している。従ってこれらの場合のナサケも、やはり親和的な快感情の一種であり、しかも対物・対状態的なもので、意義としては、対人関係の分野における「好意」に対して、「好感」とよんでおける。受け入れやすい快い状態・事態に関わっている。

ただ、そうするとこうした「好感」のナサケはいずれもナサケーナシという形で、期待はずれな失望感をもたらしているわけで、第一章で紹介したところの有元秀文氏が「失望」と命名された「行為者が、対象を、自己の目標と

する価値基準に照らして、劣性と判断し、失望し、傷つく心情」の意義をもつ現代語のナサケナイとほとんど同じものにみえる。確かに、現代語のナサケナイは、この「好感」のナサケの存在がナシで否定されるところから派生してきたと考てよさそうである。しかし、中古語のナサケーナシはいまだ完全に有元氏の分析された意義内容と同じものにはなっていない。「失望し」まではだいたい当てはまるが、「傷つく心情」にまでは多くの場合、至っていないと見うけられる。現代語のナサケナイの「行為者」（批判者・発話者）が「傷つく心情」をもつ例は、氏の示したもので示せば、次のようである。

「今ね、考えていたら、つくづく情なくなつたの。あたしほんとうに力になつてくれる男の人って、誰もないのよ。やつぱり、女って、男が頼りね。」

（火野葦平『花と龍』）

「馬鹿よ、あんたは」涙声で邦江がいった。「そんなに解釈や説明のこと、こんなときに考えたりして。本当に情けない人よ」邦江は目を拭こうともせずに涙をこぼした。「あたしはぜったいにこの子を助けるわよ。」

（三木卓『震える舌』）

お前はなんだ、おれがいやなのか、亭主のいうことがきけないのか、と亭主がいうと、アサは情けなくなり

身がこわばるのを感じた。

（富岡多恵子『少女たちの桜通り』）

まったく、悪い夢を見ているようだよ。なさけないっ  
たらない。こんなことになって、外も歩けなくなる。

（略）駅前には確か産婦人科の病院があったね。あそこ  
でいいから、明日にでも行きなさい。

（津島佑子『山を走る女』）

同氏は、百三〇冊程の文学書で用例を調べた結果、現代語  
ナサケナイの修飾する動詞は「見える」「思う」「なる」の  
みであったといわれるが、これらの「傷つく心情」を示す  
例も「情けなくなる」の形や強い感動表現の文に用いられ  
ており、ナサケナイが言語主体の心情に深く関わる語であ  
るのだからことが知られる。しかし、中古語のナサケナ  
シはいまだそこまで限定的に用いられていない。中にはナ  
サケナイとほぼ同じとみられる例も次のようにあるが、

今、（子のお前が母の）我ニ耻ヲ与ヘテ、借レル所ノ  
稲ヲ強ニ責ル事、極テ情无シ。然バ、我モ又汝ニ令吞  
シ乳ノ直ヲ責メムト思フ。今ハ母子ノ道ハ絶ヌ。

（今昔物語集卷二〇ノ三二）

先にあげた源氏物語夕顔の例は語り手からの単なる批評の  
言葉で、語り手を光源氏の女房と解してもそこに語り手自  
身が傷心する程の光源氏への身入れが認められないし、若

紫の例は光源氏の心情にそつた表現でありながら、女との  
共寝がかなわず帰らざるをえないことに対する彼の〈失  
望〉の気持ちは推測できても〈傷心〉までは読み取れない。

「好感」を示すとみられる他の多くの例も同様である。

昔の人のゆゑある御すまゐにしめつくり給けん所をひ  
きこばたん、なさけなきやうなれど、（源氏物語宿木）  
（浮舟が勾宮の手紙を）さばかりめでたき御紙つかひ  
かたじけなき御ことのはをつくさせ給へるをかくのみ  
破らせたまふ、なさけなきこと、といふ。

（源氏物語浮舟）

此比の人は、うたてなさけなきまで着重ねても、猶こ  
そは風なども起こるめれ。

（栄花物語かゞやく藤壺）

（各家で死者が出て）返すく世語りにもしつべき年  
の有様にこそなさけなう、心うけれ。

（栄花物語衣の珠）

（法華寺の寂円房と）生死無常のなさけなきことわり  
など申して（とはずがたり巻四）

（中陰の）はての日は、いとなさけなう、互に言ふこ  
ともなく、われ賢こげに物ひきしたため、ちりぢりに  
行きあかれぬ。

（徒然草三〇段）

平六のししやうにて御入候か、なさけなひ事にており

やらしますぞ、平六は此春はてられて御ざ有よなふ  
(ぬし) 大蔵虎明本狂言集の研究本文篇5女狂言之

類)

従つて「好感」のナサケは現代語の複合語ナサケナイが派生する前の段階にあるとみておくことができる。ただ、この「好感」のナサケは挙例のとおりナサケーナシの形ものがほとんどなので、平安中期において既に慣用的なものであったのかとも思われるが、しかし、この同じナサケーナシの形が、その関わるものが美的な性格を帯びれば、源氏物語葵巻「いと長き人も額髪は少し短うぞあめるを、むげにをくれたる筋のなきやあまりなさけなからむ」のように美的情趣のナサケに移行するし、また人間の行為等に関わる場合でも、先に挙げた今昔物語集巻二〇ノ三一のように「今、我ニ耻ヲ与ヘテ、借レル所ノ稻ヲ強ニ責ル事、極テ情無し」と対事態なら「好感」とみなせるが、伊勢物語六三段c「こと人はいとなけさなし」と対人なら「同情(艶情)」等に移行することになり、他のナサケと当然のことながら連絡している。しかもそうした他の分野でも、親和的な快さをもつナサケの存在がナシと否定された時には、自然「失望」の気分の発生も予想されるわけであるから、存在の否定の形で多くみいだされる「好感」のナサケも、そうした他の分野のナサケーナシ一般の中で、対象が

物・状態・事態に設定された状況下において、〈失望〉の気分をともなつて多くみいだせるものなのだとはいえる。このことは、対物・状態・事態が美的情趣を含み込む、より上位の意義分野であると考えらるならば、一層自然の現象となる。

また、中世以後にみいだせる一見不可解なナサケも、ナサケの本質が親和的な素直な快感情にあると考えておくと、その意味が理解しやすいものになる。例えば、次のような例である。

法顯三蔵の、天竺に渡りて、故郷の扇を見ては悲しび、病に臥しては漢の食を願ひ給ける事を聞て、……(「心よわき気色」と評した人に対し)、弘融僧都、「優に情ありける三蔵かな」といひたりしこそ、……。

(徒然草八四段)

これは対人的なナサケでもなく、美的情趣のナサケともみなしにくいのが、法顯三蔵が天竺で故郷の扇を見て故郷をしのび、病中に漢の食を願つたことがナサケアリと評されたのも、自分に親和的で快く受け入れられる祖国の文化を、心細く文化的に違和感を抱いている外国の旅中に慕つたからなのであり、また、「情」に<sup>シヅメ</sup>対応する次のようなナサケも、

マシワルコトラフコウスレハナサケカシセントカサナ

実は人情一般や相互理解でなく、人に対する親和性、好意的な心情の形成にその核心があるのだと考えられる。

## 八

こうして、中古に至り文献に姿を現しはじめるナサケという語は、その当初から源氏物語頃までの用例を中心に検討することで、その意義の核心に、感覚に親和的な素直な快感情というものを想定することができ、諸々の具体的な「なさけ」はその、対人あるいは対物・状態・事態、対美的性格、艶情等の分野における、主体的感情・感覚、主体的能力・機能、客体的な概念等のレベルでの変容・現前した姿なのだと言え付けられる。

だが、こうした諸義の派生関係は、当初の用例の見られる古今和歌集や伊勢物語において、少ない例にもかかわらず代表的な意義が既に認められることと、それから約一世紀後の源氏物語頃にはもうほとんどの意義が出揃っていることぐらいいえるが、その間の具体的な状況は用例の質量的問題もあり、資料的に明確なことの言えないのが現状であろう。

ただ、当初からかなりの意義派生が認められ、一世紀後の平安中期にはほとんどの意義が出揃っていたということ

の背景には、それなりの当時の文化的事情の存在を考慮しておくこともできる。というのは、美的情趣の分野のナサケは仏教彫刻を除く当時のほとんど全ての芸術や芸事に関与していたが（絵画の例も今鏡藤波の下巻に見えていた）、この時代のいわゆる藤原文化の特色は、概して優美典雅な趣をもつことにあり、当初は均斉（調和）的で、後には感覚（装飾）的な傾向を強めたといわれるが、ナサケの、狭義の「美」や「優美」に比定される美的性格は、こうした当時の文化的嗜好と呼応する要素をもっているし、伊勢物語六三段で「こと人はいとなさけなし」と評価された在中将がつくも髪「世心つける女」にみせた、「世の中の人」として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬ物を、この人は、思ふをも、思はぬをも、けぢめ見せぬ心なんありける」という仮構的な愛の態度は、光源氏の六条院に集められた妻妾たちのみせた「夏冬の時につけたる遊びたはぶれにもなまいどましき下の心はおのづから立ち交じりもすらめど、さすがになさけをかはし給ふ」（源氏物語御法）という交際の姿勢とともに、「自由恋愛」が横行し一夫多妻制のしがらみに耐えねばならなかった当時の貴族社会におけるあるべきらしい状態であったからである。このようなナサケが「好意」や「好感」という人間の素直な感情・感覚を経由して、人間の根源的な活力の一つである親和的な快

感情というものに由来していると考えられたことは、知的な作用をも含む総合的な心的機能を表すココロ、悲哀に傾きつつも深い感動全般に関わるアハレとともに、この時代の文化の性格を規定していく重要な特徴であるとみられるともあれ、このような性格をもつナサケが、対人、対物・事態・状態、対美、対性愛、と多分野に浸透していったことが、この語の多義性の発現とこの時代の文化の質とに大きな影響を与えたことは確かかなようである。それ自体が文化でもある言葉の問題は、一つひとつの語の性格の検討においてもやはり避けて通れない。

## 注

(1) 有元秀文「はずかしい・なさけない・あきましい」の意味分析『言語学演習81』東京大学文学部言語学研究室、昭和五十六年三月。

(2) 索引等をもちいて用例を検討した仮名作品は以下のとおりである。中世以降のものも調査したが、中古の範囲を中心と名を記すにとどめる。なお本文の引用は、以下にことわるものを除いて日本古典文学大系本に、和歌集の類は新編国歌大観による。竹取物語、伊勢物語、大和物語、平中物語、土佐日記、蜻蛉日記、多武峯少将物語（群書類従）、篁物語、三宝絵詞（古典文庫）、宇津保物語（同本文と索引本文編）、落窪物語、枕草子、和泉式部日記、源氏物語（角川文庫）、更級日記、浜松中納言物語、夜の寝覚、狭衣物語、堤中納言物語、栄花物語、大鏡、讀岐典侍日記（日本

古典文学全集、古本説話集（岩波文庫）、今昔物語集、とりかへばや物語（講談社学術文庫）、住吉物語（新日本古典文学大系、梁塵秘抄、八代集、新編国歌大観索引、平安朝歌合大成索引）。

また、訓点資料関係の参照した諸先学の諸業績は以下のとおりである。春日政治「西大寺本金光明最勝王經古點の国語学的研究」、築島裕「知恩院藏大唐三藏玄奘法師表啓」『訓点語と訓点資料』四、同「興福寺大本大慈恩寺三藏法師伝古點の国語学的研究」、同「大般若経音義の研究」、同「平安時代の漢文訓読語に就きての研究」、中田祝夫「古點本の国語学的研究」、同「東大寺諷誦文稿の国語学的研究」、大坪併治「訓点資料の研究」、同「訓点語の研究」、小林芳規「西大寺本不空羼索神呪心経寛徳点の研究」『国語学』三三、同「平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究」、同「角筆文献の国語学的研究」、太田次男・小林芳規「神田本白氏文集の研究」、宇津宮睦男「白氏文集訓点の研究」、西岡弘「遊仙窟索引」、西崎亨「世俗諺文和訓索引」『訓点語と訓点資料』四八、曾田文雄「訓点語彙——高野山光明院藏悉地羯羅經承保元年点」『訓点語と訓点資料』八。

(3) 小川環樹氏によれば、漢語の「風流」には「官能的な美、なまめかしさとも云うべきもの」を指す用法が南朝の梁の詩文あたりからみられ、『遊仙窟』などの「風流」もその「意義の餘波とも云うべ」きものなのだという（小川環樹「風流の語義の変化」『国語国文』第二十卷第八号、昭和二十六年十一月）。こうした中国語の「風流」は現代北京語「fēng liú」にも受け継がれている。なお、白氏文集卷四「李夫人」の「人非木石皆有情 不如不遇傾城色」の「情」がココロでなく神田本天永四年点や源氏物語蜻蛉のようにナサケと訓まれているのにも、「傾城色」との関わ

りがうかがわれる。

(4) ユエ・ヨシは次例のように度を越えたと不都合も生じた。なお次例のナサケは同情の意義が主要であろう。

(朝顔宮は) つれながらさるべきおりく／＼のあはれをすぐし  
給はぬ、これこそかたみになさけもみはつべきわざなれ。猶ゆ  
ゑつきよしづきて人めにみゆばかりなるはあまりのなむもいで  
きけり。

(源氏物語葵)

(5) 『源豊宗著作集4』四〇頁。

(6) ただし、天徳四年内裏歌合十七番恋左能宣歌「恋しきを何につけてか慰めむ夢にも見えず寝る夜なければ」の評「左歌頗有情仍召為勝」の「情」をナサケと訓むならば、悲哀の情調を含むナサケの早い例となりえるかもしれぬが、ここの「恋し」さは悲哀を帯びるというより依然知的な余裕がある。

(7) 大西克礼『美学』下卷三一七頁、参照。